

日本の旅のルーツには、二つのタイプがあると言われる。一つは明確な目的を実現するための「伊勢参り」タイプの旅である。もう一つは行雲流水こううんりゅうすいのように、さすらう「奥の細道」タイプの旅である。「伊勢参り」タイプの旅は、目的を実現するための「手段としての旅」なに対し、「奥の細道」タイプの旅は、旅それ自体を目的とする「目的としての旅」だと言えることができる。

人間の欲求には「所有 (having) 欲求」と、「存在 (being) 欲求」がある。「所有欲求」とは人間の外側に存在する事物を所有することで充足される欲求であり、「存在欲求」とは人間と人間、人間と自然との触れ合いによって充足される欲求である。「所有欲求」が充足されると、人間は「豊かさ」を実感する。これに対して「存在欲求」が充足されると、人間は「幸福」を実感することができる。スウェーデンでは子供たちに、これまでの人間社会は欠乏を克服するために、「存在欲求」を犠牲にして、「所有欲求」を充足してきたけれども、一定の「所有欲求」を充足できたので、これからは、人間の人的欲求である「存在欲求」を追求する社会が花開くことになると教え論している。

「存在欲求」を追求する人生は、走り抜けるように生きる

青い鳥を探す「観光」の旅

東京大学名誉教授 スローライフ学会学長 神野 直彦

のではなく、行き交う人々と会話をし、道端に咲く草花を愛あでながら、ゆつくりと歩むスローライフとなる。そうすると人生に警たえられる旅も、人々や自然と触れ合い、「存在欲求」を充足するスローな旅となる。つまり、ビジネス旅行のような効率求められる「手段としての旅」ではなく、旅それ自体を楽しむ「目的としての旅」が求められるようになる。

それは「観光」の旅の本来の意味を充実させることだと言ってもよい。「観光」の「観」とは悟りを開くことである。「光」は明るい希望を意味する。つまり、「観光」とは人々や自然と触れ合い、明るい希望を見いだし、悟りを開くことなのである。

あえて繰り返せば、「存在欲求」が充足されると、「幸福」を実感できる。そうだとすると、「存在欲求」を追求する「観光」の旅とは、「幸福の青い鳥」を探し求めて、さすらう旅だということもできる。もちろん、「幸福の青い鳥」が我が家の炉辺にいたように、自己の「生」のうちに「幸福の青い鳥」を見いだし、悟りを開くために、私たちは旅の衣を整えて旅立つ。成熟化社会の旅とは、そうした「幸福の青い鳥」を探し求める「観光」の旅なのである。

(じんの なおひこ)